

第22回ミツバチ科学 研究会に参加して

河島 雄一郎

玉川大学ミツバチ科学研究施設のミツバチの研究も50年を迎え、今後のさらなる研究に期待して今年も参加させていただいた。毎年、自分の勉強不足を痛感しつつも3年目となった。今年は、50年記念にふさわしくとても充実した研究会であった。

午前のプログラムでは、まず主任の吉田忠晴教授がこの50年の経緯を述べられた。今、私自身が研究会に参加できるのもこれまでの長年にわたる玉川大学の皆さんの努力と、研究の成果だと思う。次に、小野正人助教授が特別報告として「マルハナバチ類の情報化学物質とその機能」について講演された。小野先生がカナダのサイモンフレーザー大学で研究していたマルハナバチのフェロモンについての報告で、雄バチの臭いの特異性による種の保存のシステムを説明していただいた。こうした知見が利用され、農産物の生産性の向上、コストダウンを計り、来る人口増加、環境破壊の防止に役立つのではないだろうか。松香光夫教授からは、昨年のアピモンディアの報告と今年3月にタイの



講演する三鷹製薬(株)の川島美生氏



松香教授の通訳で講演するシーリー教授

チェンマイで行われる熱帯養蜂会議とアジア養蜂研究協会大会についての予告があった。

午後のプログラムでは、「みつばち用アピテン」について、製造元の三鷹製薬(株)学術部の川島美生氏が講演された。「みつばち用アピテン」はアメリカ腐蛆病に対しての新規予防薬ということで、ミツバチの飼料に混入して、餌と共に摂取されて作用するため、使用法についていいいな紹介となった。すでに導入を決めた養蜂家の方もおられるかと思うが、私自身はまだしばらく様子を見てから……と考えている。

続いてコーネル大学のトーマス・D・シーリー教授の講演「ミツバチの巣箱はハチミツ工場—ミツバチがハチミツを貯めるまで」があった。「ミツバチの知恵」で存知あげていたシーリー教授だが、改めて、ミツバチの蜜の収集、受け渡し、その後の貯蜜までのシステムについて、コロニー内での収集と、貯蜜の分業制、その時々ダンスの役割について花蜜の収集能力や貯蜜の処理能力とのバランスを例に、わかりやすく説明していただいた。講演の中でシーリー教授が触れられたことは、来場されていた皆さんには経験から理解されることが多かったと思うが、私のように経験不足の人間にとっては大変興味深く新鮮に聞くことができた。総合討論も収集、貯蜜に関しての質問や、マルハナバチの利用価値についての質問が盛んに出ていた。今回の研究会は、私の専門(蜂針療法)からは離れた話題が多かったが、これを契機にミツバチのことを広く勉強したいと思った。

(〒431-0201 浜松市篠原町 22064-1 (有)河島ハネー)